

聖書：マタイ 17：14～20

説教題：からし種ほどの信仰があるなら

日時：2019年11月3日（朝拝）

前回は高い山でイエス様が栄光のお姿に変貌された記事を読みました。イエス様の御顔は太陽のように輝き、その衣は白く光り輝きました。しかもモーセとエリヤまで現れて、イエス様と語り合っていました。それを見たペテロはそれぞれに一つずつ幕屋を造りますから、いつまでもこの素晴らしい状態にとどまりましょう！と提案しましたが、それは御心でありませんでした。イエス様は十字架にかかって私たちの身代わりに死んでくださり、私たちの救い主となるために来てくださったお方です。そこでイエス様は高い山における栄光の状態を後にして、再び地上での歩みへと戻って行かれます。私たちはこれから十字架に向かって進むイエス様は、実はこのように栄光に輝くお方であるということをいつも心に留めていたいと思います。イエス様の十字架は、イエス様が弱くて無理やり引っ張って行かれたものではなく、栄光に輝く主が私たちの救いのために自ら進んで選び取ってくださったものであることをいつも心に留めておきたいのです。

さて栄光の山から下りて来たイエス様と3人の弟子は、さっそくこの世の現実と直面させられます。群衆のところに行くと、一人の人がイエス様のところに近付いて来て御前にひざまずき、懇願しました。「主よ、私の息子をあわれんでください。てんかんで、たいへん苦しんでいます。」これは通常のとんかんとは違う状況であったようです。18節から悪霊の働きと関係していたことが分かります。そのため、彼の息子は何度も火の中に倒れたり、何度も水の中に倒れたりしていました。このようにして彼のいのちは、彼を滅ぼそうとする強い悪霊の存在によって危険にさらされていたのです。

この状況に一層暗い影を落としていたのは弟子たちが彼を治せないでいたことです。この弟子たちは、イエス様と一緒に山へ登っていた3人の弟子、ペテロとヤコブとヨハネを除く9人の弟子のことです。一見、これは彼らに対する無茶な要求ではないかと思うかもしれませんが、弟子たちはすでに悪霊を追い出す権威をイエス様から授けられていました。10章1節：「イエスは十二弟子を呼んで、汚れた霊どもを制する権威をお授けになった。霊どもを追い出し、あらゆる病気、あらゆるわずらいを癒やすためであった。」（8節も参照）そして彼らは実際にこの権威を使って悪霊を追い出し、病人を癒やす働きをしたことが聖書に記されています。そこでこの父親は、イエス様がいなくて

もお弟子たちに頼めば癒やしてもらえらるだろうと期待して、彼らに頼んだのです。ところが彼らにそれができなかつた。息子に何の変化も起こらない。そこで弟子たちは当惑して、オロオロするばかりだったのです。「あなたの弟子たちは治すことができませんでした」と父親に言われ、どこに身を置いたら良いのか、縮こまって無力感に苛まされる状況だったわけです。

これはある意味で今日の私たちと似ていないでしょうか。私たちの周りにも多くの問題があります。多くの悩み、苦しみ、嘆きがあります。ある意味で悪の力が支配している結果です。そんな中、私たちはイエス様の救いを知り、信仰を頂いている者たちとして、何とかして神の国の恵みを取り次ぎたいと思っています。そして神の恵みのご支配を広げたいと願っています。そうして色んなことに取り組んでみますが、この世の悪が支配する状況に勝てない。むしろ敗北する。イエス様の良き証しが立てられない。周りの人々から、あの人たちではダメだ、クリスチャンだと言うが何の力もない。使い物にならない。そう言われて無力感に苛まされている。そんな今日の私たちの姿に重なって来るのではないのでしょうか。

さて、この状況を見てイエス様はどうされたでしょう。イエス様はまずこう言われました。「ああ、不信仰な曲がった時代だ。いつまであなたがたと一緒にいなければならないのか。いつまであなたがたに我慢しなければならないのか。」 イエス様はここで誰について嘆かれたのでしょうか。「曲がった時代」とありますから、これは当時の世界全体を指していることは確かだと思います。しかしそこには弟子たちも含まれていると言えます。彼らは悪霊を追い出す権威を授けられた者たちとして、当然その働きができて然るべきでした。彼らの存在によって暗い世に光が輝いているべきでした。なのにそれが見られない。弟子たちもまた不信仰な曲がった時代の一部になっている。イエス様はその状況を深く嘆かれたのです。いつまで私はあなたがたといっしょにいなければならないのでしょうか。いつまであなたがたに我慢していなければならないのでしょうか！と。

しかしだからと言ってイエス様は弟子たちとこの世を見捨てることをしません。「その子をわたしのところに連れて来なさい」と言われます。イエス様はなおお担って行ってくださいます。彼らを運んで行ってくださいます。そして連れて来られた子をお叱りになるとどうだったでしょう。悪霊は出て行き、すぐにその子は癒やされました。ここで

のイエス様の力は圧倒的です。暗闇の支配は追いやられ、神の恵みの支配が広げられました。改めて思うべきは、イエス様の栄光は山の上にだけあるのではないということです。そこから降りて来たこの世界でも、イエス様がおられるところには、この祝福が輝き現れた。どんなに嘆きが支配している状況にも、イエス様による神の国の祝福は現れ得る。私たちは様々な困難の中で、このことを覚えたいと思います。イエス様が臨んでくだされば、このように悪の支配は追いやられ、山の上で見たイエス様の栄光が現わされ得るのだと。

さて、このあと弟子たちがイエス様にそっと問うた時のことが 19 節以降に記されています。彼らは今回のことに当惑し、恥じていたようです。そこでイエス様に問います。「なぜ私たちは悪霊を追い出せなかったのですか。」 それに対するイエス様の言葉は厳しいものでした。「あなたがたの信仰が薄いからです」とイエス様は言われました。これはどういう意味でしょうか。ある人は、ここでイエス様は信仰がないとは言っていないと言います。それがあるにはある。しかしそれが薄いこと、小さいことが問題にされているのだろう、と。しかしイエス様は続けて「もしからし種ほどの信仰があるなら」と仰っています。からし種はゴマ粒より小さい種で最も小さいものの象徴です。つまりイエス様は、あなたがたにはからし種ほどの信仰もないと仰っている。ということは信仰がほとんどないと仰っていることと同じではないでしょうか。あるいはそこまで言うのが厳しければ、確かに弟子たちはこれまで信仰に生きて来た人たちではあります。しかしこの時は生ける信仰には生きていなかった。生きていない信仰など信仰と呼べるのかということになります。まさにこの時の 9 人の弟子たちはそんな状態にあったのです。

このイエス様のお言葉は厳しいものですが、しかしこれは同時に聞く者に大きな希望を与える言葉でもあるのではないのでしょうか。先に述べたように、からし種は最も小さいものの象徴です。イエス様は、そのからし種ほどの信仰があれば！と仰っています。つまり私たちの信仰の大小は問題ではないということです。私たちはとすると、自分の信仰は大きい小さいかを問題にして、こんな私の小さな信仰では、・・・云々と考えがち。しかしイエス様のお言葉によれば小さい信仰で OK。からし種ほどの信仰があれば、この山に「ここからあそこに移れ」と言えば移ります！と言います。皆さんの中に、この御言葉を知って、ひそかにある山に向かって「動け！」と念じたことのある方はいらっしゃるのではないのでしょうか。私もあります。実家の石巻の家の前には牧山と

いう山があって、ある時、目をつぶって「動け！」と念じてみたことがあります。期待しながら目を開けてみましたが、やっぱり何も変わっていません。「やっぱり」と思っている時点で、すでに不信仰なのだ。私はやはり信仰の人ではないのだと残念に思ったことがあります。しかしここはそういうことを約束している箇所ではありません。

「山が動く」というこの表現は、当時、何か大きな困難を乗り越えること、不可能と思われることを克服することを意味する象徴的表現でした。本当に山が動いたら大変です。信仰深い人(?)によって、いつ富士山があっちこっちに移動してしまうか分からなくなり、地図も作ることも不可能になってしまいます。そうではなくて、これは人間には無理と思えることも可能となるということです。その際、大事なものは自分の信仰の大きさや量ではありません。それはからし種ほどあれば十分なのです。期待すべきは私の小さい信仰を通してでも働いてくださる神の偉大な力の方です。この時の弟子たちにはそれが欠けていたのでしょう。彼らはこれまで悪霊追い出しや癒しのみわざをして来たことがありました。しかしいつしかその「方法」に頼るようになっていたのかもしれない。自分たちの「経験」に頼っていたのかもしれない。あるいは今回、目の前に連れて来られた人の症状の重さを見て、これは自分たちには無理ではないかという不信仰な思いが心を支配していたのかもしれない。あるいはイエス様や3人の核となるメンバーが不在のため、心細い気持ちになっていたのも知れません。いずれにせよ、彼らはこれまで通りの形式でやってみたのでしようけれども、神により頼む信仰が欠如していたのです。からし種ほどの信仰もなかったことが問題だったのです。だからできなかったのだとイエス様は仰っています。しかし逆に言えば、からし種ほどでも信仰があれば山は動くということです。これは聞く者に大きな励ましとチャレンジを与える言葉ではないでしょうか。

イエス様は最後に「あなたがたにできないことは何ともありません。」と言われました。これだけを切り取って読むと、随分と思切った言葉だと私たちは思うかもしれません。さすがにこれは言い過ぎではないかと。しかし私たちは聖書を読む時、いつも文脈の中で読まなければなりません。また聖書全体との整合性の中で解釈しなければなりません。文脈に注目すると、イエス様はこの言葉をどんな流れの中で語られたのでしょうか。今日の箇所では問題にされていたことは、12弟子たちは悪霊を追い出し、病人を癒やす権威が与えられていたのに、信仰が欠如していたために、その働きができなかったということです。しかしからし種ほどでも真の信仰があればできないことは何もないと言われていきます。つまりこれは彼らに与えられた使命遂行に関する言葉です。私たちが気ままに

心に思うことが何でもその通りになると約束している言葉ではありません。ですから私たちも主によって与えられた自分の働きや使命との関わりにおいて、この言葉をまず考えるべきだと思います。その神に与えられた任務の遂行においてできないことは何もないのだと。

また聖書全体との整合性からどんなことが言われるべきでしょうか。はっきりしていることは神の御心にかなわないことはできないということです。そういう意味ではここに「できないことは何もない」と言われていますが、できないこともあるのです。神が良しとしないことはできないのです。たとえば来週の箇所でイエス様は2回目の受難予告をされます。イエス様はできないことがないと言っても、この道から逃れることはできないのです。あくまで神の御心の範囲内という条件は当然つくのです。ですからこういったことはもちろん今日の言葉を解釈する上でも考慮に入れる必要はあります。聖書は聖書によって解釈します。しかしそのあまり、私たちは今日の箇所の貴重なメッセージを割り引いて考えたり、これをほとんど無視するようになってはいけません。イエス様が言いたいこと、それは神を信じ、神により頼む者には、どんなに偉大な世界が開かれているかということです。いかに無限のリソース、資源が開かれているかということです。この貴重な真理を軽んじないようにしなければなりません。むしろこの真理を受け止めて、この祝福に生きるようにと私たちは今日の御言葉を通して招かれているのです。

さて私たちはどうでしょうか。私たちも今日の箇所の9人の弟子たちに似ていることはないでしょうか。イエス様を信じ、イエス様の力を味わい知り、イエス様の恵みの支配を広げたいと思っているのに、それができない。様々な働きを主から与えられて、それを担いたいと思っているのに、うまく行かない。以前にはできたはずのこともできない。どうしてなのか。なぜなのか。そうして世の人と同じ暗い顔をして、イエス様から「ああ、不信仰な曲がった時代だ!」と言われることはないでしょうか。しかし私たちは今日の御言葉に導かれて、もう一度真に神を見上げ、神により頼む信仰に生きる者でありたいと思います。からし種ほどの信仰で十分とされています。自分の知恵や力、技術、これまでの方法あるいは経験により頼むのではなく、神に望みを置いて私たちの働きに当たりたい。それは当然、祈りの生活に現れるでしょう。新改訳2017では、21節がなくなって欄外に移動しています。そこに「後代の写本に21節として〔ただし、この種のもは、祈りと断食によらなければ出て行きません。〕を加えるものもある」

と記されています。これはおそらくマルコの福音書の平行記事からコピーされた言葉がここに加えられた後代の写本もあるという意味で、オリジナルの原典にはなかったということでしょう。しかしこのような言葉を付け加えたいくなるのは自然だと思います。神に本当に信頼し、神に望みを置く生活は、私たちの祈りの生活に現れて来るはずです。そのようにして神に信頼するなら、たとえその信仰がからし種のような小さなものであっても山が動く！とされています。必ずしもそれは私たちの願う通りではないかもしれませんが。しかし神は私たちの信仰と祈りを通して、ご自身の御心にかなう最善の形で「山が動く」ということをしてくださる。私たちももう一度神に信頼を置いて、この信仰の力、神の力に生きる者とされたいと思います。そして神の恵みの支配を広げる働きの一翼を担わせていただき、私たちの救い主の父なる神に栄光を帰す真に価値ある働きを御前にささげる歩みへ進んで行きたいと思います。